

# スポーツ史における女性：英国の視点から

キャロル・オズボーン<sup>1)</sup>(英国リーズ・ベケット大学)

## Women in Sports History: UK perspectives

Carol Osborne  
(Leeds Beckett University)

ここ十年間、英国ではスポーツ史における女性に関する研究が、急速に拡大した。本報告では、以下のことを述べたい。第一に、なぜそうしたことが起こったのか、またこうした議論を前進させた研究の例を示したい。次に、今ある歴史記述が抱える問題点に光を当ててみたい。本発表の焦点は、スポーツ史という学問領域 (discipline) にある。それは、スポーツに女性が参加する歴史についての語りではない。話を始める前に言うておかなければならないことがある。それは、私たちはスポーツ史における女性を、そのスポーツにおける位置が、過去と現在の両方のジェンダー関係の産物であることを理解せずに考察することはできない、ということである。

### スポーツ史における女性に関連する (学術的) 歴史記述が急速に広がった理由とは何か？

この問いに答えるのは簡単ではない。主要因に、女性の貢献が、社会、経済、政治、文化的な生活で認められてきているという、社会一般の雰囲気がある。英国でのスポーツ史は、学術的な歴史研究の中では「隙間的」学問である。英国の大学で働くスポーツ史研究者は相対的にごくわずかしかおらず、そのほとんどが男性である。これは1980年代以降生み出されてきた歴史的研究のタイプに直接影響を与えてきた。しかし、過去十年で英国でスポーツ史を研究する学会—英国スポーツ

史学会 (BSSH) 一の代表者に、学会に参加し、機関誌であるSport in Historyに論文を投稿する女性が多く見られるようになった。

英国には、スポーツ史を研究する女性研究者の分離主義的「運動」がないことを理解することは重要である。各々個人は違うテーマで、異なった大学で、異なる時代を対象に研究してきている。例えば、私が1996年に歴史学の学位論文を書き始めた時 (ジェンダーと英国登山組織: およそ1855年から1955年まで (*Gender and the Organisation of British Climbing, c. 1855-1955*)), そのテーマは非常に変わったものであった。多くの男性研究者たちは、私の研究が当然女性についてのものだと思っていた。彼らは、私の研究では「ジェンダー」に男性が含まれ、それが男性登山者と女性登山者との関係に分析的に取り組んだものとは思わなかった。学術研究領域の女性史が、女性が公的領域への道筋を獲得していく闘争に焦点を当てていったのもこの時期であった。例えば、政治、法律、宗教、教育、有給雇用に関するものである。しかし、女性史の実践者たちは、スポーツを通じた女性の身体の解放が、女性の「権利」を研究する中で、歴史的に高い重要性もっていたことを認識できていなかった。

そのため学会としてのBSSHの影響力は、重要であった。なぜなら、それがスポーツ史に関心がある個々の女性研究者を結びつけたからである。

2010年私は、BSSH特集号、*Sport in History* (Vol. 30, No. 2) の編集に招かれ、BSSHの同僚のFinoa Skillenと共に編集作業を行なった。私たちはこう書いた。スポーツ史は確立されたが、女性は出版された研究という点ではまだその人数に見合っていない、と。私たちが驚かされたのは、1980年代、1990年代に優れたフェミニスト研究者が、女性の身体、体育やスポーツを通して女性たちが経験したことに関する基本的著作を産出していたことであった。例えば『英国女性のスポーツと身体の解放：1870年～1914年 (*Sport and the Physical Emancipation of English Women*)』(Kathleen E. McCrone, 1988)、『絶えず傷つけられた女性：19世紀末の女性、医師、運動 (*The Eternally Wounded Woman: Women, Doctors, and Exercise in the Late Nineteenth Century*)』(Patricia A. Vertinsky, 1989)、『スポーツする女 (*Sporting Female*)』(Jennifer Hargreaves, 1994) である。これらの著書は、今日でも研究者が授業で使用している。

スポーツ史における女性についての英国の研究は、北米スポーツ史学会 (North American Society of Sports History: NASSH) で注目される女性研究者たち、またこうした研究者がスポーツにおける女性に関する研究を公表する「国際スポーツ史研究」(*International Journal of the History of Sport*) の影響を受けてきている。今日では、歴史的に女性が行ってきた様々なスポーツと参加についての政治に関する研究を見つけることができる。私は2016年まで、*Women's History Review* (Vol. 24, No. 5) の特別号の共同編集にあたったのだが、その際に明らかになったのは、スポーツ史という男性優位の専門領域が、歴史記述の範囲に女性を含めることを認めてきたことであった。それらがまた高く評価されるのは、女性が社会のスポーツに起因する意味の解明に不可欠なものであった、ということである。より正確に言えば、歴史的にスポーツは一つのジェンダー化された社会的実践であった、ということである。

### 英国において、個人的・一般的関心は、スポーツ史の研究課題にどのように伝わるのか

一般的に、スポーツ史家は、彼らが研究対象とするスポーツの選手であり、実践家であり、熱狂的観客である。おそらくこれは、なぜ多くの英国スポーツ史が、男性のサッカー、ラグビー、クリケットに関するものなのか、その理由を説明してくれる。歴史的に、これら3つのスポーツは、男の子や男性の間で最も人気あるスポーツであった。また、それらは英国スポーツ文化の中心であり続けている。より最近では、コーチング、水泳、テニスに注目が集まってきている。ここでもまた、その研究を行う歴史家たちは皆、これら活動の実践家なのである。

「男性中心」のスポーツ史と同じく、女性スポーツの歴史記述で目立つのは、サッカーである。女性のゲームについて書く女性研究者は、選手であったり、管理運営者であったり、ファンであったりする。彼女たちの研究は、ある一つのスポーツにおけるジェンダー・ポリティクスを私たちに教えてくれる点で価値がある。しかしサッカーは、歴史的に女性のスポーツ的関心を構成した幅広い諸活動を代表するもの、ではない。例えば、ネットボールやフィールド・ホッケーといったゲームは、19世紀末からサッカーよりも女性が継続的にプレーしてきたものである。しかし、これら2つのスポーツは、英国の研究では等閑視されてきた。フィールド・ホッケーとネットボールは徐々に認知されてきてはいるが、ここでもまた、この研究を行なっている女性研究者はこれらゲームのプレイヤーなのである。

第一に、明らかに英国のスポーツ史記述は、歴史家の個人的関心をめぐって構築されている。それゆえ、スポーツ活動の、とりわけ女性が歴史的に楽しんできた活動の多様性を代表するものとして観察することができていない。

第二に、私たちが忘れてならないのは、専門的な書き手が、一般的な人々の関心に見合うよう、スポーツ史について研究し書籍を出版するということである。こうした書籍は、学術的なものより

も広く読まれる。それはまた、スポーツにおいて支配的な男性の関心をも映し出している。例えば、2002年に設立されたスポーツ書籍大賞（The Cross Sport Book Awards）は、英国スポーツの著作や出版を後押しする。全カテゴリー（伝記、自叙伝、サッカー、クリケット、ラグビー、自転車）の書籍の大多数は、歴史ものである。全てのカテゴリーで大多数の書籍は、男性によって、男性が支配的なスポーツの、男性について書かれている。私たちはこれを、1994年に設立されたBSSHの（学術的な）アバーデア卿文学賞（Lord Aberdare Literary Prize）と比較することができる。この賞を受賞した女性はたった3人しかおらず、彼女たちの書籍の焦点は、スポーツ史における女性にはなかった。

これは、ジェンダー化されたスポーツの伝統や遺産を表しており、また男性の関心が、いまだに一般的な範囲、および学術の世界でスポーツについての知的生産でいかに強力であるかを示している。英国社会の中でエリートスポーツの大会や著名人の知名度の高まりは、一般的に、歴史的な研究を導く。これは歴史記述における第二の問題に関係する。

### 研究者が強力な概念としての「スポーツ」を超え、歴史的に身体活動への女性の参加について幅広く接近する必要

ヨーロッパ評議会は1992年にスポーツをこう定義した。気軽な参加や組織的参加を通じて、体力と精神的良好さを表したり向上させること、社会関係を作ること、あるいは競技の全てのレベルにおいて結果を得ることを目的とする、身体的活動のあらゆる形式である。

このスポーツの定義は、包括的なものであり、幅広く応用され受け入れられるものである。しかしながら、英国のスポーツ史は、研究という範囲で言えばそれを反映していない。

1960年代以降、「スポーツ」は、英国文化の中でたいへん強力な概念になった。つまりこれは、学術的な専門領域としてのスポーツ史の興隆と一

致する。英国の一般大衆向けに、毎日メディアによって報道されるスポーツは、サッカーであり（圧倒的に多い）、ラグビーであり、クリケットであり、競馬なのである。テニスとゴルフのトーナメント、F1自動車レースもメディアによって取り上げられるスポーツである。テニスを除けば、ほとんど男性のスポーツである。フェミニストの研究者であるアン・ホール（M. Ann Hall）は、スポーツの実践を「社会的に構築された、そして社会の中で強力な集団の関心と必要に奉仕するように、社会的に定義されたもの」（1995）という。ここで私たちは過去との連続性を目の当たりにする。つまり、歴史的に言えば、その関心とは男性の関心であったし、また影響力あるスポーツ機関も男性によって設立されてきたものなのである。これは、英国社会における多くのスポーツから女性を差別すること、あるいは全面的な排除につながる。スポーツ史家は、現代と歴史的諸傾向、両方が一緒になったものによって影響される。多くは、引き続き、ほとんど競技的なエリートスポーツの文脈において男性が成し遂げたことを優先する研究に固執している。

英国スポーツ史から何が、あるいは何が失われてきているのか、またそれはなぜなのかについて、学問的なスポーツ史家の間で、共同的で戦略的な議論というものはない。このことには、「スポーツ」における女性を研究する人々が、その歴史的経験がヨーロッパ評議会理事会の定義に反映されていることがわかっているだけに、失望感が募る。それは、ジェニファー・ハーグリーブス（Jennifer Hargreaves）の基本的なテキストである『スポーツする女』（1994年）にも示されている。彼女は、19世紀中葉から20世紀後半までに、70以上もの様々なスポーツや身体的でレクリエーション的な活動があったことを突き止めた。ハーグリーブスの仕事は、「スポーツ」という概念に含まれるものの理解を拡張したのだ。このことは重要である。なぜなら、18世紀からその後にかけて（その始まりは競馬とクリケット）男性によって制度化され、明文化されたスポーツ的な追求

は、女性身体への態度（弱さ）やジェンダー的に適切な振る舞い（女らしさ）のために女性の参加を制限したからである。もちろん、女性たちは、レクリエーションのための身体活動に参加するのを止めることはなかったし、ただ止むを得ず、排除されることに対して自らの解決策を探し出し、自らのスポーツ文化を作り上げていったのである。

1870年代からその後、組織的な女性スポーツの発展に重要な影響を及ぼしたのは、学校や大学の女性の体育であった。これは、英国における「スポーツ」史の第三の問題へと繋がっていく。

### スポーツへの女性参加を促す上で非常に重要な教育機関への注目の欠如

体育の歴史に関する分析の中で、マレー・フィリップスとアレクサンダー・ポール・ロパー（Murray G. Phillips and Alexander Paul Roper, 2006）は、スポーツ史という学問分野は、「体育の歴史の多様な領域」から出現したと述べた。しかしながら、1990年代以降、体育の中に分け入っていく研究は、英国では姿を消してしまい、スポーツ史が主要な研究学問分野となっていった。

『女性第一：1880-1980年の体育における女性の伝統（*Women First: The Female Tradition in Physical Education, 1870-1914*）』（Kathleen E. McCrone, 1988）が出版されるまで、学校や大学での女子体育が、大人になってからの女性スポーツ文化にどんな影響を与えるのかについて、ほとんど注意が向けられてこなかった。フィールド・ホッケーに関する私の研究が示したのは、学校体育と大学で継続してプレーすることが、サッカーのようなスポーツ史における男性のチームスポーツの優位性に対し、積極的で対抗的な語りを提供することであった。なぜならこれは、何千もの少女や女性が、英国中の学校、大学でフィールド・ホッケーをプレーし、大人になってからもクラブでプレーしたからである。研究はまた、少女たちがネットボール（排他的に女性だけのスポー

ツ）を学校で学び、また学校を卒業した後も女性たちによってプレーされたことを示している。個人的、共同的な女性スポーツ史への出発点は、つねに体育における彼女たちの経験の調査検討であらねばならず、どのようにしてこれが変革者として、実践家として、レクリエーションなプレイヤーとしての将来のスポーツの選択に作用したのかを調査しなければならない。

私たちは、スポーツに対する女性たちの態度や1945年以降のスポーツの選択に、体育の影響がほとんどなかったことを知っている。政府の政策や教育カリキュラムの分析に加え、まだ生存中の女性の口述証言から学ぶ機会がある。1960年代後半の女性解放運動の興隆はまた、一つの重要な歴史的文脈を、スポーツの経験やスポーツの選択に影響を及ぼす女性の身体への態度がどのように変化するのか検討するために提供した。

### 共同的方法論、および女性のスポーツ史のより包括的な記述を導くことができる国際交流を組み込んでいく必要

英国における女性のスポーツの歴史は膨大である。だから、私たちは、私たちの知識の最も大きなギャップに取り組んでいくよう、将来に目を向けなければならない。もし、私たちがなぜスポーツの現在がジェンダー化されているのかを理解したいと思うのなら、私たちは、女性のスポーツへの関わりと歴史的にもってきた女性と社会に対するその価値について、よりまとまりのある語りを産出するための戦略的なアプローチをとらなければならない。これを行うために、歴史家は、体系的に、異なる社会的背景をもつ女性たちによって行われてきたより幅広いスポーツ活動の検討に着手しなければならない。現在、有力な研究の選択肢は、ほとんど男性が好むスポーツ（サッカー、クリケット、ラグビー）に関連している。つまり、こうした歴史に対する女性の関わりの出発点は、排除である。研究は、歴史的にプレーされ、そしてまだ今日も女性がプレーしているスポーツについての、より強力な対抗的語りを確立するた

めに必要とされる。私たちは、より一層、なぜ、どこで、どのように女性たちが自らを組織化し、よく管理し、自らのスポーツ文化を（例えば、ホッケー、ネットボール、ラウンダース、「フィットネス」運動において）発展させてきたのか、知る必要がある。このように、私たちは、女性スポーツの伝統があることを、異なっているが男性のそれと同じくらい重要なものがあることを確定することができる。

連合王国内の地域、地方、国中の身体的レクリエーションの活動に関する比較研究は、また女性の経験と参加の条件との間の類似点と相違点とは何か、を確かめるのに役立つ。これは研究者間の協力についてのフェミニストお気に入りの方法論を必要とするだろう。しかしこれは、簡単に実践して達成することができないのである！

もっと重要なことに、本日私は、スポーツ史という学問分野の中で女性の地位について検討してきた。英国という私たちがよく思い出すのは、多くの近代スポーツが英国人によって「創造された」こと、そしてこれが世界中でスポーツ実践に多大な影響を与えたことである。これは真実かもしれない。しかしスポーツの歴史家として、私たちは、いつスポーツが「輸出され」、「輸入され」、文化交流の始まりの一過程として「流布された」のかを強いて理解しなければならない。これは女性にとっては特に重要である。なぜなら、近代スポーツが受容され、実践された全ての時代で、全ての場所で、女たちは排除と差別の対象にされたからである。これは、スポーツにおける女性の経験について、力強い国際的な対話を打ち立てる共通の理由を提供する。これはフェミニストの見方である。つまり、それは少女や女性たちによってなされたスポーツ文化への貢献を評価し、国際的文脈での多様性を高く評価するのだ。それは、どのように女性が歴史的に互いに学んだのか、また今日どのように女性研究者が研究や分析への異なるアプローチを通じて互いに学べるのかを確認しようとする。これは、スポーツ史における女性を一国レベルで理解することを超えるよう私

たちを促す。それは、女性のスポーツへのグローバルな結びつきに考慮するよう私たちを促し、そしておそらく、それ自体で一つの学問分野として女性スポーツ史が確立されるよう私たちを促していくことになる。

そのため、私は、今日、日本の研究者の皆さんにお会いできる機会に感謝し、皆さんの洞察から学べることを楽しみにしている。

（訳：大沼義彦）

訳者注：文中、イタリック体で書かれた箇所は、下線で示し、ボールド体で書かれた箇所は太文字で示した。

## 注

- 1) スポーツおよびレジャー史担当准教授（英国リーズ・ベケット大学カーネギー・スポーツ学部スポーツ社会科学学科）。2006年～2017年英国スポーツ史学会（BSSH）理事、2011年～2014年まで女性で初めて会長を務めた。マウンテン・ヘリテージ・トラスト理事、（英国北部地域）スポーツ・ヘリテージ・ネットワークコーディネーター。

